

イエス・キリストの 偉大さ、素晴らしさ

コロサイ1章13～23節
2022年11月13日
松田 基子 師

使徒パウロは、もちろん神様からの啓示によるものでしたが、イエス・キリストの偉大さ、素晴らしさを最も深く、良く知った人でした。それだけに、命がけの伝道をして、人々に、

『イエス・キリストこそ神様が遣わされた
神の御子、真の救い主である』
ことを宣べ伝えました。

彼は地中海世界に向かって、小アジアからヨーロッパまで、イエス・キリストによる唯一の救いを伝えて歩きました。各地にイエス・キリストを信じる人々が大勢興りました。或る人は、仕事で都心に出て来て、パウロの伝道で、イエス・キリストを救い主と信じ、自分の町に帰って伝道し、そこに教会を築いた人もいました。パウロは、小アジアの現在トルコにありますエフェソで、3年間伝道しました。エフェソはエーゲ海地方の中央に位置していて、ヨーロッパとアジアの貿易の中継地点でありましたから、繁栄の大都市で、諸方面から多くの人々が集まりました。彼らの中で多くの人々が、パウロが伝える言葉を聞いてイエス・キリストを信じました。

エフェソから東内陸部へ約170キロの地点にコロサイという都市がありました。コロサイも、内陸部の公道が通じており、地方都市でした。この町の出身であった、エパfrasは、パウロから福音を聞いて、イエス・キリストを信じ、コロサイに帰って伝道し、教会を建てました。それがコロサイ教会です。当初彼らは、とても良い信仰を持っていて、その報告にパウロは、コロサイ書1章3節、4節で、

「わたしたちは、いつもあなたがたのために祈り、わたしたちの主イエス・キリストの父である神に感謝しています。あなたがたがキリスト・イエスにおいて持っている信仰と、全ての聖なる者たちに対して抱いている愛について、聞いたからです」

と言い、続いて6節には、

「あなたがたにまで伝えられたこの福音は、世界中の至るところでそうであるように、あなたがたのところでも、神の恵を聞いて真に悟った日から、実を結んで成長しています」と言っています。

この様に最初は順調に信仰の成長がありました。しかし、イエス・キリストを信じる信仰は、一度信じたら変わらないと言うものではありません。人間の心はいつも定まりません。あんなに熱心に信じていたのに、と思われていた人が元の考えに戻ったり、別の教えに引き込まれるという事が起こります。

確かに本当の信仰は、自分の全存在を懸けるべきものですから、とことん悩み抜かなければなりません。世の中に、信仰を迫るものは多くあります。真の信仰とはそれが人間の我欲を満たすためのものか、人間が考え出したものか、真に人間を超えた、人間が従っていくべき、真の神様であるか、悩み抜いて人間を超えた世界を支配し、導いておられる神様であることが分かって、初めて信じ、信じたら、全存在を掛けて、従っていくべきものです。

そこまでの見極めは人間が必死に求めて行かなければなりません。しかし、教会の中においても、教会の話しを聞けば、

『あなるほど』

と思い、世間の人の話を聞けば

『なるほど』

と思う人。また、信仰を自分の都合の良いように色づけする人もいます。それはいつの時代にもあることです。エパfrasが必死に導いたコロサイ教会に、キリスト教を潤色させた教えを説く教師がやって来たのです。コロサイ地方には、元々自然崇拜があり、月神礼拝や占星術もあり、密儀宗教もあるなど、コロサイ地方一帯は色んな宗教が入り交じった、混淆宗教の地でありました。その教えの一つに諸霊崇拜がありました。

『諸霊が人間の運命を支配し、命を手中に収め、神の領域の入口を管理している』
と言うものです。

そこで偽りの教師は、
『キリストはそれらの一人に過ぎない』
と解いたのです。そして、
『神の臨在を得る為には、禁欲と
厳しい訓練が必要である』
と教えました。キリスト教の本質とは、かけ離れた教えに、パウロは危機を感じました。直ぐにでも行って、その誤りを正したいところでしたが、彼はこの時、敵対者達の陰謀によって、囚われの身でありました。そこで、偽りの教えに曝され(さらされ)ているコロサイ教会の信徒たちに書いた手紙が、コロサイの信徒への手紙です。

キリスト教と、他宗教との決定的な違いは、
『人間は神様に対して、罪がある』
と言うことです。多くの宗教は、神様の存在を認めても、
『神様とは遠い存在で、どうしたら神様に近づくことが出来るだろうか、と色々考え抜きます。その中には、禁欲や、厳しい訓練をすれば神様に近づけるのではないか』
と難行苦行を行ったりするものがあります。一方、キリスト教の神様は、
『天地万物、人間の命の与え主です。』
そして、神様は何よりも、
『御自身との愛を築き、世界に愛を築いて行くために人間を創造されました。』
人間はその神様の愛を受け、神様に聞き従って人生を歩み、真の幸を得るべきでした。

ところがそこに誘惑者が入って来ました。人間は神様を疑い、誘惑者の言葉を信じて、神様の命令を破ってしまいました。人間はその様にして、神様との関係を切って、神様に逆らう存在、悪への誘惑者と手を結んだのです。それが罪です。その結果は当然滅びの世界、闇の世界です。誘惑者はその様にして、人類を自分の配下に置き、罪の暗闇に閉じ込めたのです。ところが人間の命の与え主である神様は、その愛の御性質故に、人類を永遠の滅びに見捨てることがお出来になりませんでした。

神様は何と、人類の罪を引き受けさせるために、罪の無い、神の御子を人類の救い主として世に遣わされました。それが、イエス・キリストで

す。イエス・キリストは、父なる神様と一つ心で、人類を愛して、全人類の罪を引き受け、全人類の価値に勝る、罪無き神の御子の体を十字架に差し出して、人類の罪を償い、贖われました。

神様はイエス・キリストの、この従順によって、人類の罪を赦し、世界の支配権をイエス・キリストにお与えになりました。その事について、パウロはコロサイへの手紙1章14節で、
「わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです」
と記しています。イエス・キリストの贖いに依って、神様から罪赦され、神様の許に行く事が出来るようになったのです。キリスト信仰の絶対的価値はここにあります。人は決して難行苦行をして、神様の御許に行けるものではありません。自分の存在の行方は、唯一重に、イエス・キリストの愛、イエス・キリストの十字架の贖いに懸かっているのです。

そこでパウロは、コロサイの信徒さん達が、偽りの教えに惑わされないように、イエス・キリストの絶対性を示しました。当時教会では既に、
『イエス・キリストとは、こう言う方です』
と言うキリスト賛歌が定型文として成立していました。キリスト者は集会に集まりますと、そのキリスト賛歌を唱えていました。パウロはそれを骨子にして、イエス・キリストの絶対性を教えました。イエス・キリストとは、一体どう言うお方なのか、それが15節から20節の言葉です。パウロはそこに重要な言葉である、教会を入れて、キリスト者の自覚をはっきりとさせました。先ず15節に、

「御子は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です」
とあります。人間の創造主であられる神様は、全宇宙、見えるものも見えないものも創造されましたが、その偉大さは、目に見ることの出来ない、つまり、時間と場所を超えた世界を支配しておられる霊であられることです。その神様が最も愛された被造物は、人間でした。人間は時間と場所に制限された見える世界に置かれました。その人間は、自己中心に生きて、神様が多くの恵を与えて、御自身を示しておられるにも拘らず、その神様の愛を知ろうとはしませんでした。

神様は御自身の間人への愛が見える様に、実感する事が出来るようにと、御子を人の世に送り、人の子として、具体的に神の愛を示されました。それがイエス・キリストです。そのイエス・キリストは、この地上に誕生される前から、神様と共におられました。御子は神様の被造物ではなく、神様から生まれた方、神様の長子です。ここで長子という意味は、神様の全権の執行者であるということです。神様は天地創造を、言葉を発せられる事によって造り出されました。その事について、ヨハネ福音書1章1節から創造主なる神様と御子について哲学のロゴスと言う言葉を用いて、その関係を示しています。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言葉によって成った。成ったもので、言葉によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった」

とあります。

ここで、神の御子イエス・キリストは神の言として表現されています。神様は天地創造を、御子によって造り出された事を、ヨハネ福音書はこのように表現したのです。パウロはその事を16節で、

「天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御子によって、御子のために造られました。」

「御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは御子によって支えられています」と言っています。

パウロが、イエス・キリストはそのように偉大な方であると、言葉を尽くして言った、その目的は、偽りの教師が教える諸霊に怯える必要が無いことを示すためでした。イエス・キリストは絶対的な権威で、諸霊の上に天地万物を支配しておられる事を宣言して、諸々の霊を恐れる必要が全く無いことを告げているのです。今日のキリスト者も、時に世間で言われている迷信や崇りがあるとされている事に、一瞬恐れを感じたりしないでしょうか。病気になったり、不幸な目に

遭ったりすると、背後に、

『崇りの所為(せい)ではないか』

と思ったりした事はないでしょうか。イエス・キリストは、諸霊を足元に従わせる力をもっておられる方です。

どの様な事に遭遇しようとも、それはキリストの支配の許に起こっている事であり、キリストが最善に導いて下さる事を信じるべきです。パウロはそんな偉大なイエス様が、自分達を如何に大切にしている下さるかを、18節に記しています。それは元々の定型文には無かった言葉です。その言葉は教会です。

「御子はその体である教会の頭です。」

「御子は初めの者、死者の中から最初に生まれた方です。」

「こうして、すべてのことにおいて第1の者となられたのです」

と言っています。

教会はどの様にして生まれたのでしょうか。それは人類の罪を贖って十字架に死なれたイエス様を、神様はその十字架の贖いを受け入れて、人類の罪を赦すその証明に、イエス様を死者の中からの復活の初穂とされました。初穂と言うのは、最初に結ぶ実であって、その後と同じ実が結びますよと言う意味です。

パウロはその事を、

「死者の中から最初に生まれた方」

と表現しています。神様はそうして、復活されたイエス様を永遠の国に於ける、御自身の右の座に着かせられました。つまり御自身の権威の執行者になされたのです。全てのことにおいて第一の者、第一の位に就かせられました。そのイエス様が教会を地上において御自身の業を担って行く体となされたのです。教会にとって、これ程の栄誉と力強さはありません。教会はイエス・キリストによる罪の贖いを受けて、神様の御許に迎えられる天国への門なのです。神様の人類救済の秘儀は、人間には想像も出来ない、人間の考えを遙かに超えたものでした。

19節に、

「神は、御心のままに、満ちあふれるもの」

詳訳聖書では、

「神の充満」

という言葉が使われています。

「神の完全、力、属性の全量が彼の内に、
恒久的に宿ることを良しとされた」

と説明されています。神様はイエス・キリストを御自身と同じ者とされたことが記されています。それは何のためであったかと言いますと、20節に、

「その十字架の血によって平和を打ち立て、
地にあるものであれ、天にあるものであれ、
万物をただ御子によって、御自分と和解
させられました」

とあります。

神様の痛み、それは、全被造物を託した人類の背きによって、人間ばかりでなく、被造物全てとの断絶が起こったことです。ローマの信徒への手紙、8章21節には、

「被造物も、いつか滅びへの隷属から
解放されて、神の子供たちの栄光に
輝く自由にあずかれる」

とありますのは、その原因は、人間の罪だと言っているのです。この全宇宙に及ぶ人間の罪がもたらした罪価は人間自身が償えるものではありませんでした。それは全人類の価値に勝る罪無き神の子の命以外に贖う事は出来ませんでした。その為に神様は同じ心で人類を愛しておられる御子を十字架に架けられたのです。

この方法によってしか、人類の罪は解決することが出来なかったのです。この様にして神様御自身から、人類との和解を求め、平和を与えて下さったのです。この様に大きな驚くべき恵を神様が用意して下さり、イエス・キリストが成し遂げてくださり、その事が地上に実現していくために、教会が建てられました。教会はそれ程の大きな恵と使命が与えられています。コロサイ教会の一人ひとりも、かつては神に背いていた者でした。その彼らに、神様はキリストの十字架に依って赦しを与え、和解して下さり、イエス・キリストの贖いによって聖なる者、傷のない者、とがめるところのない者と見てくださるのです。この驚くべき恵を受けながら、イエス・キリストを引き下げ、全き救いを手放し、間違った信仰に

逸れてはならないのです。

パウロはコロサイの信徒さん達に、23節で、
「ただ、揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、
あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません」

と命じています。私達にも信仰の危機は、いつやって来るか分かりません。

箴言の4章23節に、

「何を守るよりも、自分の心を守れ。
そこに命の源がある」

と記されています。私達は日毎イエス・キリストの十字架に平伏し、罪深きこの身を、神の御子の命で贖われ、御子の絶対的権威の許に置かれている教会に連らせて頂いていることに驚きを感じるべきです。

その恵に心から感謝して、ここから一步も逸れることなく、天の御国を目指して歩んで行こうではありませんか。

お祈りを致します。

愛と憐れみに富み給う天の父なる神様

あなた様の私達人間に対する愛は、独り子さえも与えて、救おうとして下さっているのに、尚も心定まらず、イエス・キリスト一途に歩もうとしないこの深い罪をお赦し下さい。

日毎十字架を見上げ、そこからイエス・キリストの偉大さ、素晴らしさを讃え、一途に信じ、従って行く者とならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。